
黒い書は告げる

粕井菜緒

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

黒い書は告げる

【Nコード】

N2375Y

【作者名】

狛井菜緒

【あらすじ】

平凡な職人見習いの少年エドガー・グリフレットは、古ぼけた一冊の古書を偶然拾う。それと同時期にエドガーの周辺で不可解な事件が起きはじめ、エドガーは徐々に拾った本が原因ではないかと考え始めたが…。

やがて拾った本のせいで数奇な運命をたどる事になる少年の成長の物語

序章（前書き）

書き直しますので誤字脱字があったら教えてください。

序章

ギシリギシリと車輪の軋む音に俺は、目をゆっくりとあける。

手には手枷。剥き出しの足首は鎖で繋がれ、皮膚の部分は鬱血していた。

窓も閉めきられた馬車の中は、俺と、俺を見張る騎士達の微かな息づかいぐらいで…とても静かだ。

どうしてこんな事になったのか…運命の悪戯だとしても笑えない内容ではないが。現在、騎士達に手枷をはめられ、足を縛られ…皇都へと護送されている。

真っ黒な護送の馬車に揺られ、真っ黒な甲冑の騎士達に見張られながら、木戸で閉めきられた馬車の窓をみやる。僅な隙間から真っ暗の馬車内に微かな光をまれ、屈強な騎士達の横顔を照らす。

今はどこで、今は何日の何時だろうか。家族は無事なのだろうか。

「…帰りたい。」

そうポツリと呟いくと、目の前にいた騎士が、ジッと静かな視線を俺に寄せた。

「…エドガー様」

「やめて下さい。…俺は騎士様に、様付けをされる身分じゃありません」

「しかし、貴方は…」

「やめてくれ。頼むからッ！」

やや、声を荒げて叫べば、騎士は目を細め、押し黙る。その瞳には憐憫の情が込められているのを俺は感じながら、「…すいません。」と騎士に謝った。

騎士も俺に一言、「いえ…」と返すと馬車の中は気まずい雰囲気が流れる。

しばらくして、髭面の騎士は俺に再び視線を向けると意を決したかのように唇を開いた。

「……私にも、貴方と同じ年の頃の娘がおります。」

「…そう…ですか」

「名をマリABELと言います…恐らくこれから先、貴方の世話役となるでしょう。」

「っ…！」

その騎士の言葉に俺は目を見開き、騎士を見上げると、そこには父親の顔をした騎士が静かに微笑んで俺を見下ろしていた。

「…なにを考えているのですか？死なせるつもりですか、自分の娘を…！」

焦る気持ちで、問いただせば、騎士は苦笑して、その手にもつ黒い本に目を落とす。

「私は貴方を、信じています。」

「っ…信じ…る？」

「貴方が、この本に負けない強い心をお持ちであると」

「っ…俺は…強くなんかない！」

「あの時。貴方はその幼い歳で、本を読み切り、暴走した本を自力で抑え込んだ。それは偶然できることでも、まぐれでもない…貴方自身の心の強さが、あってこそ。その、証拠に貴方は『覚醒契約』の後だと言つのにも関わらず、現在も自我を保っている」

「…っ…この手枷の効力のお陰です…よ。」

騎士と話していると、隣から柔らかな香りが漂い、はじめ…その香りを嗅いでいたら俺の瞼がゆっくりと落ちていく

「…眠いですか？」

「…また、安眠香を焚い…たん…ですね。」

チラツと横に座る女騎士の手に収まる、小さな香炉から、眠くなるような甘やかな香りが俺を包み思考を蝕んでいく

「…あまり、無理なさらないための安全策です。申し訳ありません。」

「……っ」

「…さあ、今はお休みください。」

なんで、こんなことになったんだろう。

きつと向かいの髭面の騎士が持つあの黒い本が原因なんだろう。

あの黒い本がなければ…あの本を拾わなければとそればかりが何度も頭に浮かんだが…もう遅い。

俺はあの本を拾ってしまったのだ。

俺は繰り返される罪悪感を抱いたまま、俺はゆっくりと瞼を閉じた。

一章

ウエルバニア皇国、西部・スイットニー。このスイットニーは伝統的な鍛冶屋が立ち並ぶ「鉄工の街」と呼ばれている

「エドガー、それが終わったら薪の補充をしとけ」

「はいっ」

俺はスイットニーの鍛冶屋横町のごくごく不通の鍛冶師見習いの餓鬼だった。

安い賃金で朝から晩まで働き、鍛冶師の親父さん達から技を叩き込まれる毎日に、不満は特になかった。

俺の死んだ親父も鍛冶職人だったし、兄貴達三人は徴兵されちまったから、俺がしっかり働かなきゃいけなかったのもある。

正直、不満など言える立場じゃなかった。

母さんは富裕層の奥さん連中のドレスを朝から晩まで縫って、若い妹達は花屋で花束作り。

そんだけ働いて月給は銀貨一枚（約五万円）で庶民の平均月給が銀貨三枚にたいしてかなり少ない。

そう、我が家は少し貧しい家だった。

親父が生きていた頃は、兄貴達三人は学校に通えていたが、親父が死んだせいで、兄貴達は学校を辞めなくちゃいけなくなった。

俺の場合最初から通っていないから、文字が読めない。

職場の兄弟子達が教えてくれるが、たぶん絵本が読めて精々で、難しい本なんて読むことはできない。

まあ、できなくてもいいけど。

そんなある日、俺は路地裏で一冊の本を拾った。

工場の炉にくべる薪を補充するため、工場の裏手に薪を取りに来たとき、それを偶然見つけた。

「なんだこの黒いの…本、か？」

黒い皮が装丁された本で、恐らく鹿の皮だろう。牛の皮でも馬の皮でもない。この手触りは、工房の親父さんが使っている財布とおん

なじだ。

縁には金色の蔓薔薇が描かれ、菱形のダイヤカットされた黒い硝子細工が嵌め込まれていた。

裏には三日月と、フードを被った髭の長い爺さんが彫られていて、細かい細工がスゲー良いもんだと直感的に感じさせた。

「古書…って売ればどれくらいかな…って落とし物に何かかんがえてんだ俺…。」

苦笑して、本を小脇に抱えて、薪の束をとって工房へと戻り、その日は仕事を終えてから交番に本を届けて家路についた。

けれど、それから一週間が経ち、その本は俺の手元に戻ってきた。

原則、落とし物は一週間持ち主が見つからない場合、拾った人間のものになる。

俺は本の事すら忘れ、工房の仕事に没頭していたので、警察官がうちに本を持ってきた時には何かやらかしたのかと内心ヒヤリとしたものだ。

「…どうしたもんかな…これ。」

「どうしたの。エドガー」

「ああ、母さん。この本なんだけど…」

「あら、素敵な本ね。」

母は竄れた表情で本を見下ろすと俺に視線をむけた。

「…あなた、これ読めるの？」

「…読めるわけないだろ。」

「なら、売ってらっしゃい。うちには必要ないものだから。」

「……あー、うん」

俺は後に、この時の母の提案を飲まずにいれば良かったと後悔する事になる。

翌日、工場の定休日だったので早速、隣の街に黒い本を売りに行った。

売ったのは老舗の骨董店で、工房の親父さんの知り合いの店だった。

売った値段はウェルバニア紙幣三枚（約三千元）。まあまあ値段だった。家族四人の食費が二週間余裕で過ごせる金額である。

その日はとても気分が良かったのを覚えている。帰りに妹たちに安い飴玉を買って、母さんにはワインを買って帰宅した。

だが、俺の人生の狂いはここから始まった。

それから二週間後…あの黒い本が、俺の手元に再び戻ってきたのだ。

「…親方、これ…」

「骨董屋のビンセントが一週間前に心臓発作で死んだんだよ。だからビンセントの女房が、お前に返すとよ。」

「な、何故俺なんですか？」

「店を畳んで、息子夫婦のいる皇都に引越すんだと。そこで店の商品売り払ったら、これだけがどうしても売れ残っちゃまって、どうしようもねーから、元の持ち主のお前に返すってさ。」

「…いや、俺もこれいらないから売ったんすけど。」

「知らねえべさ、んなの。さっさと持って帰れ。俺も本なんていらねーって」

親方のめんどくさそうな表情に、それ以上言葉が浮かばず、結局また黒い本を持ってかえることになった。

二度帰ってきた本。正直、…要らないし、どうしたものかと悩んで家に帰ると、近所のおばさんが、母さんに晩御飯のおかずのお裾分けにきていた。

「あ、こんばんは。」

「こんばんは。今日も残業かい？」

「ええ…まあ」

「野菜と豚肉たっぷりのポトフ作ったから、みんなで御上がり。とくに、お母さんにはちゃんと食わせてやるんだよ？この頃また痩せちまって…」

…この、おばさんの話は実は長い。それでもかと言わんばかりに長いのだ。

しばらく、会話に付き合っていると、おばさんは俺の手に持っている本に視線を落とし、目を丸くさせた。

「これ、どうしたんだい？」

「…拾ったやつが返ってきたんです」

「あら、まあ…立派な本じゃないのさ。あんた読むのかい？」

「いや、俺…本読めても絵本がやっとだし…正直要らないんだよね」

そう言えば、おばさんは目を輝かせて、肉厚な体を擦り寄せてきた。

「エドガー、良かったら、おばさんがそれ貰ってもいい？おばさんの勤め先の貴族の坊っちゃんがこういうの大好きなのよ」

このおばさんは領主の子爵家で使用人として働いている。恐らく坊っちゃんとは、おばさんの勤め先の貴族の事だろう。

俺は快諾すると、その場でおばさんに黒い本を渡した。

だが、驚くことに、黒い本は三日後に再び俺の手元に最悪な形で戻ってきたのだ。

「…おばさん」

再会したおばさんは冷たい棺桶の中で、手を組んで横たわっていた。

おばさんは、子爵家に行く途中…馬から落馬して頭を打って死亡したという。

変わりはてたその姿に百合を手向けていると、おばさんの娘さんが泣きながら、俺に例の黒い本を返してきた。

流石に、今回は疑うしかなかった。売った先の店主が死に、あげた先のおばさんが、三日後に死ぬなんて…この本は渡った人間を死に

至らしめる呪いの本じゃないかって

怖くなって捨てたくなつたが、捨てたら自分が呪われるかもしれないし、誰かに渡ればその人を死なせることになる。

（どうしたらいい？この本は教会に持っていくべきなのか？でも、そんな本を持っているなんて誰にも言うわけにもいかないし）

ただの鍛冶師見習いの俺に、答えてくれる人は当然なく、俺は黒い本を持ったまま途方に暮れるしかなかった。

*

皇都・スフォールの中心にそびえたつ

白亜の宮・エシオン宮殿の回廊を気難しい表情の男が足早に抜け、ある大きな扉の前に立つと声をはりあげた。

「円卓会議の中失礼いたします。私は魔法省第三課一級魔術師のヴ

エルサス・ホンクライツと申します。至急、皇王陛下、大司教殿下にお知らせしたい議があり、無礼を承知で参上いたしました。お取り接ぎを！」

その声が会議室の中にも聞こえたのか、ギイッと重厚な扉が開き、中から深緑色のローブを着た上品な老人がヴェルサスの前にやってきた。

胸にある家紋からして宰相のクラインベルク大公であることを察し、ヴェルサスは片膝をつき、降頭する。

「直答は許さぬ。ここにて奏上せよ」

「は、ご報告申し上げます。本日、15時32分西部スイットニ―方面にて《元書》の魔力を感知。覚醒値が急速に上昇しております！」

その言葉に大公は目を見開きヴェルサスを駆け寄ると、確かめるかのように、ヴェルサスの肩を掴む。

「《元書》…色は!？」

「…黒にございます！」

「黒…だと…！」

それを聞いたクラインベルク公は、その場に座り込み放心していると、急に会議室の扉が開け放たれる音が響きわたった。

「ヴェルサスと言ったな、急ぎ兵部省・魔法省のイレイン長官を王宮に召喚せよ。ウエンツ、何を呆けておる。貴様は聖騎士団と軍部に《狩り》の通達しろ」

会議室から現れた赤髪の皇王に、大公とヴェルサスは慌てて礼をとると、立ち上がりあわただしく歩きはじめた。

「…元書が出現しましたか。」

赤髪の皇王は振り向き、その声の主に「面白くなってきた」と言わんばかりに、ニヤリツと笑い向ける。

笑みを向けられた白衣の老婆は、苦笑すると、赤髪の皇王に歩み寄った。

皇王の名前はシュバルツ・エルスト・フォンバッハ・ウエルバニア。通称・シュバルツ三世といい、御歳46のウエルバニアの皇王である。

燃えるような赤髪に、金色の瞳…これだけみれば皇室の血統なのは間違いないが。不衛生な無精髭と腰まで伸びた髪、着崩した衣装からして皇王と言うより山賊の首領のような容姿である

対する白衣の老婆こと、アリシア・ハーベスト大司教は、品がよい貴婦人とした佇まいをしており、やや白髪まじりの金髪や、穏やかな董色の瞳からしてかつてはさぞ美しかったことが伺える。

七柱の神々が創成した世界、グラールフォール。

258の国が存在するなか、ここウェルバニアは東大陸において、中規模の国土を保有していた。

鉄の名産地で、東大陸の鉄の流通をしめることから別名《黒鉄の国》とも呼ばれている。

また、魔法も盛んで学校では魔法が基礎科目になるほど庶民の生活（水道や農耕など）に浸透している。

世界基準で言えば、大国ではないが、そこそこ豊かな国といった感じだろう。

彼等はそれを支える二大柱である。

「《黒い元書》の魔力値を他国にも察知されていると、少し厄介ですね」

「…なに、軍を直ぐにこちらに向けるのは無理だろうて。我が領土で出現したならば我等が保護して当たり前というもの。…何か難癖つけてきたら、追い返してやるわ。」

活達に笑うシュバルツ三世に、アリシアは何とも言えない表情で息を吐き出す。

頼もしいと言えば頼もしい言葉だが、一步間違えれば戦争の危機となるのに実に彼らしい発言だ。

「…にしても読み手はどんな人間であろうな。“あの”黒の元書が見初めたほどだ。是非とも会って話をしてみたいものだ。」

「…ええ。」

「のう、大司教よ。出現している元書は今いくつあるのだ？」

「4つですよ陛下。イスベア王国に黄、ベリーズ共和国に白、コラダ大公国に赤、バンデミール帝国に青の計4つにございます」

「では今回で5つ目と言うことになるか」

「はい」

頷いたアリシアから皇王はふむと、顎に手をあてる。

しばらく思案した皇王は、踵を返すと再び会議室の扉へと足を向ける

「…陛下。」

「大司教、読み手を確保しだい4ヶ国に連絡をとるぞ。良いな？」

「御意のままに。しかし、何よりも読み手の居場所の判定を急がせねばなりません。大惨事になる前に……」

「大参事、か……。」

そう呟くとシュバルツ三世はマントを翻し、会議室の重厚な扉の奥へと姿を消した。

アリシアもまた会議室に戻ると、そつと自分の胸元のペンダントをみやり、そつと目を臥せた。

《元書》

それは世界に七つしか存在しない神々の手記

七柱神が書いたとされる全ての書物と、言語の原点

それらの書物にはみな、七柱神の力が宿り、意志をもった神具と伝えられている。

神々が遊び半分で作った本のためか、読める人間はいない。読める人間がいるならば、それはよほど、その神々と類似した何かを秘めた存在であり、《元書》の力に耐性があると言うことだ

《元書》を読める人間を人は《読み手》と呼び、恐れ敬った。

そんな神代の存在がなぜ地上にあり続けるのか、それは誰も理解は

できない。

《元書》を求めて滅んだ国は数知れず、《元書》によって滅びた国もまた数知れず。

故に《元書》が《読み手》の元に現れたなら即時手に入れようと国々は動く

《元書》は絶対的な兵器であり、それを読み解き手繰る《読み手》の存在は、国に防衛力と抑止力を与えるからだ。

実際に《元書》と《読み手》を手に入れた国は発展し、大国と呼ばれている。

「…選ばれた読み手が…強い人であれば良いのだけど…」

選ばれた《読み手》の中にはその重責に耐えられずに、精神的においつめられる者が多い。

《読み手》が暴走して大惨事を起こした例もある

皇王の心中は決して穏やかなものではなからう。たしかに《読み手》と《元書》を手に入れたなら、鉄を狙う諸外国より国を守る抑止力となるが、それは同時に自国に爆弾を抱えることになる。

《元書》の力を使うことも、それに頼ることで《読み手》に依存してしまう。

皇王・シュバルツ三世の性格としては依存するつもりも、頼るつもりもサラサラないが、他国に渡ることだけは避けたい、と言っのが本音だろう。だから彼は、《保護》といったのだ。

恐らく全て教会に押しつけるに違いない。

アリシアはこれからさきの事を考え、不安を胸に抱いたまま、会議室へと足を向けた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2375y/>

黒い書は告げる

2011年11月17日17時55分発行